

平城宮跡東院地区の調査(平城第481次)

平城宮の東院は、皇太子や天皇の宮殿がおかれ、華やかな儀式や宴会がおこなわれたことが知られています。2006年度から断続的な調査を進めており、今年度は昨年度の第469次調査区の西隣において発掘調査をおこないました。東院地区の北西部にあたり、調査面積は816㎡、2011年4月4日より調査を開始し、6月24日に終了しました。6月23日には現地説明会を開催し、天候不良の中、650名もの方々に脚をお運びいただきました。

検出した遺構は、建物13棟、堀7条、柱穴列1条（以上はいずれも掘立柱）、溝3条、土坑1基等です。周辺の調査成果を含め検討した結果、これらは6時期以上に区分することができ、東院地区西部のこれまでの調査と同様に、建物群の頻繁な建て替えがあったことがあきらかになりました。

区画施設に着目すると、大きな改変であったことが明確になります。1期から2期には東西溝、東西堀により、南北に区画していたのが、3期には一転して、南北堀により東西に区画されます。4期にはこの堀も廃され、前後の時期と異なる土地利用がなされましたが、5期には再び3期に似た建物配置がなされます。そして6期になって、南北80尺におよぶ空間が南北に2つ並ぶようになりました。建物や堀の配置の変更が繰り返されながら、奈良時代の末期には極めて整然とした区画が設けられたことがあ

きらかになったのです。

これらの変化は、東西溝の付け替え等排水計画の変更ともなうものでした。昨年度の調査で、石組溝の存在があきらかになっていましたが、今回の調査ではその全容があきらかになりました。詳しくみると、この石組溝は、安山岩、花崗岩、凝灰岩といったさまざまな石を寄せ集めて、構築されていました。周辺の排水を集めていたものと考えられ、東から西へと強い傾斜をもっています。当初は、東西にまっすぐ通されていましたが、ある段階で右下の写真のように下流部分を北へとクランクさせています。傾斜地を利用しているこの周辺は入念な排水計画が必要とされていたことを物語っています。

建物に着目すると、東院地区西部でこれまで検出されていた大規模な総柱建物は調査区南辺にのみみられ、他は比較的規模の小さなものでした。また、出土遺物をみると、北部を中心に大型の甕類等、土器の出土量が多く、この周辺に東院地区の中枢を支える裏方ともいうべき、厨や貯蔵施設等が展開していたことが想定されます。

こうみると、裏方的な性格をもつ今回の調査区ですが、その一方で須恵器や銅で造られた火舎の獣脚が出土しています。相当な地位にある人物が使用した貴重なものと考えられます。東院地区中枢部へと迫る今後の調査への期待がますます高まってきました。

(都城発掘調査部 鈴木 智大)



第481次調査区と宇奈多理神社の森（北西から）



急な傾斜をもつ石組溝（西から）